東近江市史 Notogawa history in digest form
能登川の歴史
ダイジェスト版

東近江市

東近江市史 Notogawa history in digest form

能登川の歴史

ダイジェスト版

編集／東近江市史 能登川の歴史編集委員会

プロローグ

東近江市の西部に位置する能登川―
琵琶湖（びわこ）に面し、愛知川（えちがわ）と繖山（きぬがさやま）に囲まれた水と緑に恵まれた地域です。
この豊かな自然のなかで、能登川の歴史と文化は育まれてきました。
本書は能登川の歴史と文化を広く知っていただけるよう、
特色ある項目を簡潔にまとめたものです。
琵琶湖（うみ）と繖山（やま）を舞台にした能登川の歴史をお楽しみください。

写真：愛知川堤防

目次

繖山と愛知川の賜物「能登川」 6

縄文時代の暮らしと祭り 10

米づくりと集落の発展 14

湖底に眠っていた遺跡 14

集落の発展 17

古墳時代の水辺の暮らし 20

古墳から寺院へ 24

琵琶湖の開発 72

江戸時代の琵琶湖新田開発 72

内湖の干拓 76

陸上交通と湖上交通 80

陸の道 81

湖上交通 83

能登川駅 86

能登川の近江商人 92

内湖漁業 96

神社と祭り 100

能登川の神社 100

春を告げる祭り 101

能登川の寺院と民俗 104

神崎郡条里 30

中世における繖山周辺地域 34

荘園と中世村落 38

繖山と武将たち 42

繖山と佐々木六角氏 42

足利将軍家と繖山 48

織田信長と安土城 49

伊庭氏と伊庭荘 52

能登川の中世城館 56

中世能登川の神と仏 60

江戸時代の能登川 66

能登川の領主たち 67

領主と村民 70

能登川の仏教美術 110

戦争と人びと 114

学校の歴史 120

水辺の暮らし 126

やわらぎのまちづくり 132

村から町、そして東近江市へ 136

自治への模索 137

村から町へ 138

東近江市へ 140

能登川をとりまく自然 142

能登川の歴史 略年表 144

繖山と愛知川の賜物「能登川」

愛知川河口に位置し、
東近江市内で唯一琵琶湖に接する能登川。
かつて、ここには琵琶湖最大の内湖
大中の湖が広がっていました。
このような能登川の地形は、
繖山と愛知川が数万年かけてつくり上げたものです。

上空からみた能登川地区

愛知川の流れ

鈴鹿山脈の谷々の清水を集めた愛知川は、永源寺地区永源寺高野・山上両町地先から湖東平野へと流れ出ます。そして、南東から北西に傾斜した地形のまま流れ下ります。やがて行く手を箕作山・繖山に阻まれ、八日市地区川合寺町付近で北進し、能登川地区種町付近で再び北西へ流れを変え琵琶湖へと至ります。

種町付近での流路変更は十六世紀に起こったと考えられており、それ以前は延長線上に進み、彦根市の荒神山付近で琵琶湖へ流れ込んでいました。さらに一万年ぐらい前には、箕作山の南方を近江八幡市方面へ流れていました。

河川は単に水が流れるだけでなく、土砂を運搬する作用があり、その河口では三角州をつくって陸地を形成します。このため十六世紀以降、愛知川河口に三角州が誕生し、十八世紀以降には栗見新田や栗見出在家の開発が進められました。その一方で、繖山によって愛知川の堆積作用が及ばなかった部分、つまり繖山の西部は陸地とならずいつまでも湖のままでした。しかし、十六世紀以降の愛知川河口の土砂と湖岸流によって砂州が形成され、琵琶湖と切り離されて内湖ができました。これが大中の湖です。

愛知川旧河道復原図

伏流水と小河川

地表水は箕作山と繖山に行く手を阻まれた愛知川でしたが、地下では山間部から平野部に流れ出てきた部分から、下流に広がった扇状地の下へと水が潜り込んでいきます。水の少ない時期、上流の紅葉橋付近では水流がみられるのに対し、中流の八千代橋付近ではほとんど水流がみられないのはこのためです。地下では自然傾斜のとおり流下するのです。伏流水となったこの水が、再び地表面に現れるところがあります。標高一〇〇メートル付近の湧水地帯です。ここを水源とする小河川が、湖東地域に多くみられます。

大同川

湧水地帯の一つ五個荘地区の湧水を源とする瓜生川、八日市地区建部日吉町の吉住池を源としながら五個荘地区で水量を増す大同川が、愛知川とともに能登川地区の平野部を築き、現在も用水として重要な位置を占めています。

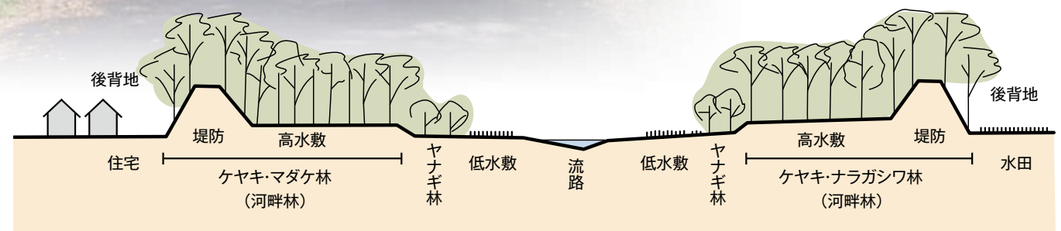
このような仕組みをもつ能登川地区の河川は、琵琶湖も水位を下げる渇水期ですらその水量はほとんど変わりません。これらの水の恵みが、能登川地区の歴史を特徴づける大きな要素です。

河畔林（川辺林）

繖山と和田山、その周りに広がる平坦な水田地帯、さらに、かつては水面きらめく大中の湖、そしてもう一つ、能登川地区を構成する風景に河畔林があります。愛知川の堤防に繁茂する樹林帯です。

河畔林には、水田地帯とは少し異なる動物や植物が生息しています。夏の夜ともなると、カブトムシ・クワガタムシ採集でにぎわいます。また、シナノキやキクザキイチゲなどの山地性の植物が自生しているのは、愛知川の水とともにその種子が流れてくるからです。かつては全国でみられた河畔林ですが、各種の開発でその多くが失われました。いまでは湖東平野を流れる犬上川とともに、愛知川の河畔林は全国を代表するものになっています。

愛知川
河畔林



湖東地域河川の模式図

帯状に見える
河畔林

縄文時代の暮らしと祭り

琵琶湖の恵みをはじめ、森の幸が同時に手に入る能登川の自然環境。このような豊かな環境が、縄文時代の人びとの暮らしを支えてきました。

縄文時代の食生活

縄文時代の食生活を知る手掛かりの一つに貝塚があります。貝塚は当時の人びとのゴミ捨て場であり、そのゴミを観察することによって当時の食生活をうかがい知ることができます。大津市の粟津湖底遺跡の貝塚は、縄文人が春から夏は魚介類を、秋から冬にかけては、木の実を主に食していた状況を示していました。

能登川地区で当時の食生活の一端をうかがい知ることのできるのが正楽寺遺跡です。この遺跡には、いまから約三八〇〇年前の縄文時代後期の人びとの生活跡がありました。幅三〇～五〇メートル、深さ二メートルもある川跡の南岸付近からは、煤のついた多量の土器が出土しました。また、この川に沿うようにして、直径一メートル前後の穴が一〇〇ヵ所以上帯状に掘られ、それぞれの穴からたくさんの石が出土しました。なかには木の実を擦ったりつぶしたりする石皿や磨石もみられました。このような状況から、ここでは縄文時代の主要な食糧源であった木の実を貯蔵したり、これを煮沸してアクを抜いて食糧にしたりしていた様子がうかがえます。

貯蔵穴群（北西から）

正楽寺遺跡調査区航空写真

正楽寺遺跡から出土した土器・石器
煤などが付着した土器や石皿・磨石が出土しました。

正楽寺遺跡の祭祀想像図

縄文人の祈り

正楽寺遺跡からは、特殊な用途に使われた遺物が出土しています。例えば、土でつくったお面（土面）です。顔や額につけて、お祈りやお祭りに使っていたのではないかと考えられています。ひょっとすると、この土面をつけていた人では?! こんな人もみつかっています。身長一六〇センチメートルで四十歳代、大柄な壮年男性と鑑定された人骨が、土器などと一緒に川跡から発見されました。縄文時代の人びとは土器などを廃棄するとき、それが再生することを願ったといわれています。墓域ではなく、川の中に葬られたこの人物は、村の守護神となることを託された人ではないかとの想定もされています。さらに、人骨出土地点から西に三五メートル付近には、正六角形状に並んだ六つの穴とその中央に火を焚いた跡が発見されており、祭りの場（環状木柱列）であったのではないかとの見解が示されています。想像をたくましくすれば、人骨となった男性が土面を身につけ、環状木柱列で祈りを捧げるというシーンが、三八〇〇年前のこの地であったのかもしれません。

また、正楽寺遺跡から約二キロメートル離れた能登川石田遺跡からは、女性を表現した土偶や男根を模した石棒が発見され、子孫繁栄や豊穣を祈ったと考えられています。

土面

（復元）

屈葬人骨

石棒出土状況
（能登川石田遺跡）

環状木柱列
（東から）

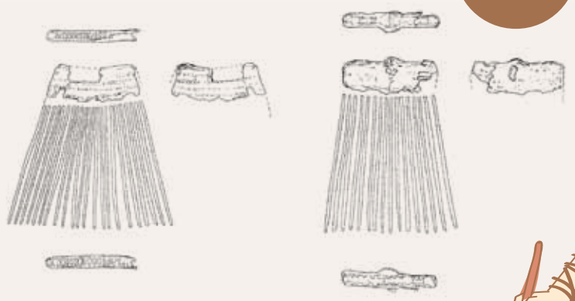
能登川石田遺跡出土土偶

縄文時代のアクセサリー
首飾りに使った垂飾や、耳飾りなどがあります。

縄文人の装い

全国から出土する土偶や遺物をみると、縄文人はかなりオシャレだったと考えられています。髪には竪櫛、耳には耳飾り、手首には腕輪といったアクセサリーを身につけていました。魔除けの意味もあったようですが、アクセサリーを身につけるという風習がすでにこの時代からあったようです。正楽寺遺跡からは、ネフライト（軟玉）という石でできた首飾りが出土し、赤色顔料が塗られた耳飾りも発見されています。なかには、赤色顔料としては貴重な水銀朱が使われているものもありました。さらに、漆塗りの竪櫛も発見されています。漆製品をつくるには多くの時間が必要です。このことから、縄文時代の人びとは食糧確保に追われる汲々とした暮らしではなく、生活を楽しむゆとりをもっていたと考えられるようになっています。

赤色顔料付着土器
内部に残る顔料はベンガラといい、装身具をつくる際に使用されたと考えられます。



結歯竪櫛
復元イメージ

能登川の歴史
「能登川の歴史」本編には
第一巻　第一章第二節
第二章第四節